

「うすらあったかさ」という 新時代の戦闘服

かつての韓国社会が求めたエリート像は「マッチョ」だった。「気を殺すな(気後れするな)」「やればできる(ハミョン・テンダ)」という苛烈な精神論を掲げてライバルを蹴落とし、一族のメンツを背負って頂点を目指す。それが、家庭でも職場でも、正義とされた生き方であった。

しかし、この「剛」の生き方は多くの敵を作る。過酷な学歴社会の果ての無理ゲーのような出世競争において、尖ったナイフのように生きることは、実は強いが脆い。一見強そうに見えて、実は組織の政変や実家のしがらみという一撃でポキリと折れてしまうリスクをはらんでいるのだ。

ワークライフバランスが叫ばれ、これまでの成功神話が制度疲労を起し始めた現代の韓国で、今、逆説的な強さを発揮しそうな人間像がある。それは私の韓国人の友人 JS の生き方だ。

彼は延世大在学中に米西海岸の有名大学へ留学した。卒業後に大財閥傘下の有名家電メーカーに入社、その後米国大手のハネウェルへの転身を果たすという、超一級のキャリアを持つ。しかし、その佇まいはどこかフニャフニャとしていて掴みどころがない。彼が観光で来日した折、数日彼を私の実家に招いたが、その際私の母が彼を「うすらあったかい男の子」と評したほどだ。

彼の実家の前時代的な祭事(チェサ)の手伝いを巡り夫婦間に火種が生じて、会社で「明日までに調査レポート提出」といった理不尽な要求を受けても、彼は正面から抗わない。最後はいつも笑って受け流してしまうのだ。

当時私は、彼が韓国社会を渡っていいのか少し心配だった。周囲にはもっと野心的で、闘争的で、熱量の高い人間があふれていたからだ。

彼は幼少期を日本の公立小学校で過ごし、他人の感情を敏感に察する力を身につけた。さらに米国留学でグローバルなスマートさを獲得し、それでありながら困ったときには人の懐にスッと飛び込んで甘える極めて韓国的な情の厚さを失わなかった。日・米・韓の長所を少しずつ取り入れた彼は、自身を大物に見せることをしなかった。これが結果的に周囲の嫉妬や敵意から彼を守ったのであろう。さらに言えば、彼のスポンジのような生き方は、自らをすり減らすチキンレースから降りつつも、結果的には自分の本当に大切なスタイルを守ることにつながったのではないか。

熱狂でも冷徹でもない、絶妙な「うすらあったかさ」で韓国社会の激しい風圧をかかわす。それこそが、一歩間違えれば空中分解しかねない現代の家族関係や、ギスギスした競争社会を生き抜くための武器だったのだ。彼自身がどこまでこれを意識していたのかは分からない。ただ、私が彼に会ったとき、そこに何か策を秘めているような印象はまったくなかった。むしろ、本人はただ自分らしく振る舞っているように見えた。

実は、彼は当世の韓国を生き抜く新たなタイプの先駆的事例だったのではないか。何十年もの時を経て、改めて彼のしなやかな生き方を見つめ直しているところである。

(アジア研究所教授 奥田 聡)



※ 研究所だより※

長雨が続く中、研究所では秋学期の活動に向けた準備を進めています。10月以降、セミナー「アジアウォッチャー」が2回実施されます。学内研究者の交流の場として毎年開催している「アジア研究サロン」も年内に開催する予定です。その際に学内研究者の優秀なアジア研究に対する研究奨励賞の授与も行います。このほか、紀要、

研究プロジェクトの報告書など研究所の主要出版物の公表に向けた最終調整が秋学期に進められます。

AIが世界経済の在り方を変え、中国の台頭や米国政治の変質がアジア地域の国際関係にも影を落としています。こうした最新の変化を高い解像度で解説すべく日夜努力しております。どうぞご期待ください。

(おくだ)